「主イエスに仕えた女たち」　2023年03月29日

その後、イエスは神の国を宣べ伝え、福音を告げ知らせながら、町や村を巡られた。十二人も一緒だった。悪霊を追い出して病気を癒やしてもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に仕えていた。（ルカ８：１～３）

主イエスと十二人の弟子たちは、神の国を宣べ伝え、福音を告げ知らせながら、ガリラヤの町や村を巡り歩いた。主イエスの言葉には力があり、神の恵みのリアリティを表わした。大勢の民衆が主イエスのもとに来て、主イエスの語られる言葉により救いを得ていた。異教の国々までも、主イエスと弟子たちの噂は広まっていった。

この宣教団は、主イエスと十二弟子が中心であったが、彼らに加わった女性たちがいたことを報告している。これは、注目すべきことである。その女性たちとは、悪霊を追い出して病気を癒やしてもらった人たちであったと記し、三人の固有名詞を上げている。まず、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラのマリア、彼女は７章に書かれていた「罪深い女」と同一視され、娼婦と見なされていた。しかし、７章の「罪深い女」とマグダラのマリアは別人であると理解されている。マグダラのマリアは七つの悪霊、即ち、重い精神病を患っていたが、主イエスに癒された女性である。彼女は主イエスに癒されたことを喜び、宣教団に加わり、奉仕するようになった。彼女は裕福な家庭の人であったようだ。次に、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、彼女は、マグダラのマリアと共に、天使から主イエスの復活を告げられた人である。ヘロデの家令の妻だから、社会的には身分が高かったのではないか。三人目はスサンナである。彼女については、聖書に何も書いてなく、知る術はない。この三人のほかにも、多くの女性たちが宣教団に加わり、自分の持ち物を出し合って、一行に仕えていた。女性たちの同行は画期的なことであった。当時、女性は、子どもの頃は父親のもの、結婚すれば夫のものとされ、女性たちの人権はなく、家を離れ、旅をすることなど、考えられないことであった。主イエスの宣教団は、時代の常識を打ち破ったのである。主イエスの宣教団に、女性たちが行動をともにしていたことが、ファリサイ派の人々から非難される対象になった。聖書では、宣教団としては、男性の働きが注目され、男性中心の宣教旅行が描かれ、同行した女性たちの働きは陰に隠れている。

受難週に入り、主イエスの身の周りは緊迫していくが、十二弟子たちは、それを理解せず、主イエスの孤独は深まっていく。やがて、弟子たちは自分たちに身の危険が迫った時、主イエスから逃げ、関りはないと言って、裏切った。

それに対し、ガリラヤからエルサレムまで、宣教団に同行してきた女性たちは最後まで主イエスに従った。十字架の下で悲しみ嘆き、死を見届け、葬られた場所も確認している。亡骸に香料を塗るために、墓に行き、そこで主イエスの復活を知らされた。復活の主イエスに、まみえたのも彼女たちであった。彼女たちは「主イエスは生きておられる」と復活の証言を始めた。当時、女性は、人として数えられず、証言能力も認められていなかった。ところが、キリスト教は女性の弟子たちの復活証言から始まっている。時代の価値観を逆転させたのである。男性中心の文化で記された聖書の中で、宣教団は女性たちの奉仕に支えられていたことは確かである。